

ミャオ語の感覚表出詞について～ミャオ語文法ノート(7)

田口善久

キーワード：ミャオ語、感覚表出詞 (expressives)、擬態擬音

1. はじめに^{1,2}

本稿は、羅泊河ミャオ語の感覚表出詞について、その下位分類とその性質を概述するものである。一般に、感覚表出詞 (expressives) は、出来事に対して話者が感得する感覚を表現する。この感覚というものは、名詞や動詞などがもつ、いわゆる知的意味とは異なるもので、感覚表出詞の音韻形式そのものが感覚表出詞の意味である感覚と関係する。言語記号としては表現と内容との関係は恣意的というべきであるが、感覚を直接、音韻形式で表現しているという意識を話者がもっていることが特徴といえる (Enfield 2007:300)。³ ただし、本稿でいう感覚表出詞は、ミャオ語におけるひとつの語類を指す用語として使用する。たとえば、ミャオ語には、感覚表出詞以外にも expressives 一般に該当する性質を持つ語類がある。ミャオ語で擬音詞とよぶ語類であるが、単独で文を構成し、感覚表出詞がもつ音韻的・形態統語的性質をもたないので、語類としては感覚表出詞と区別する(注2における IDEO が擬音詞である。例12に実例がある)。

ミャオ語の感覚表出詞は、以下のように音節数によっていくつかに分類される。

1. 四音節感覚表出詞：動詞に後続し、動作・状態についての擬態的・擬音的感覚を表現する
2. 二音節感覚表出詞：動詞に後続し、動作・状態についての擬態的感覚を表現する
3. 単音節感覚表出詞：動詞に後続し、動作・変化が刹那に発生する様子についての擬態的・擬音的感覚を表現する

感覚表出詞は、すべて以下のような共通の形態統語論的特徴がある。

- (a) 単独で文を構成しない(動詞、名詞、類別詞は可能)
- (b) 否定辞(例えば *muA-*) で否定できない(動詞は可能)
- (c) 類別詞と共に起してまとまりをなさない(名詞は可能)

¹ 本稿は、羅泊河ミャオ語の記述を行うものである。この言語は、ミャオ・ヤオ語族ミャオ語系に属し、中国貴州省中部に分布する。本研究の対象は、貴州省開陽県高寨郷の地点語 (lect) である。この企ての趣旨・記述の方法などは、田口 (2016) に準じるが、表記の仕方については、田口 (2019) を参照していただきたい。本稿では特に断りのない限り、「ミャオ語」とは羅泊河ミャオ語を指す。本研究においては、コンサルタントの宋雲氏にすべての例を見ていただいた。御礼申し上げます。

² 本稿で使用する略語を以下に示す。

1：一人称	3：三人称	CLF：類別詞	CONJ：節連結詞
DEM：指示詞	EXPR：感覚表出詞	FLL：フィラー	IDEO：擬音詞
INTJ：間投詞	NMLZ：名詞化標識	NUM：数詞	PN：固有名詞
RCP：相互化標識	SG：単数		

³ Enfield は expressives というものについて、“(N)ative speakers have a strong sense that their phonological form is non-arbitrarily related to their meaning” (2007: 300) と述べている。

(d) 重複できない (類別詞は可能)

したがって、動詞、名詞、類別詞といった自立的形式とは区別されるべき存在である。一方、感覚の表現という非文法的な意味内容をもっているため、文法的形式ともいえない。本稿では、感覚表出詞という語類を建てて論じる。以下に、音節数によって3つに分類した感覚表出詞のそれぞれについて簡述する。

2. 四音節感覚表出詞

四音節感覚表出詞は、音声音韻的には以下のような特徴がある。

- ・ 4つの音節の声調は、ABACの声調パターンをテンプレートとする⁴
- ・ 音節頭子音は、XYXYというパターンをテンプレートとする
- ・ 第2音節は、卓立されて長めに発音される
- ・ 第2音節は、通常のB声調より高めに (ときおりファルセットで) 発音される
- ・ 第3音節目は弱音節で発音される⁵

4つの音節は、第1音節がA、第2音節がB、第3音節がA、第4音節がCというように、それぞれがもつ声調が決まっており、任意の子音XとYが、それぞれ第1音節と第3音節、第2音節と第4音節の音節頭子音として現れる形式をもつ。第2音節は特別に卓立されて発音され、音節は長めになり、声調は通常のB声調 (調値は[55]) より高いピッチで発音される。ファルセットの発声で発音されることもある。

次に、形態統語論的には、前節で述べた4つの特徴以外に以下のような特徴がある。

- ・ 動詞の目的語の後に生起する

動詞に目的語がある場合には、それより後に生起する。次にテキストからの例を示す。⁶ 例1では、動詞 *mpaB* 「くつつく」が目的語に *kanB* 「私」をとっており、その後に感覚表出詞 (グロスにおいてはEXPRで示す) が生起している。

(1) *niB-piB aAniB tsoC- zoCseA, kanB muB ηtshuBηtshuA, puBleA- ponA qaB ...*
3-house brother then tell 1SG go shake fully fall excrement

puBleA- ponA qaB mpaB kanB -puA?leBpəA?luC.
fully fall excrement stick 1SG EXPR

「兄は言った。『おれが行ってゆすると、糞が落ちてきて体中にべったりくつついた。』」

『兄弟の分家』

⁴ ABACの順に並ぶ4音節のまとまりは、動詞を修飾する副詞類にも表れる (例えば、*tshiA?shiB?shiA?shiC-* 「こっそりと」)。これらにも何らかの感覚表出的側面があると思われるが、これらは、音韻的な特徴及び動詞の前に位置するという統語的な特徴が異なる。本稿では、これらを感じ覚表出詞には含めない。

⁵ 弱音節は、典型的に語末から2音節目に表れるもので、母音部分が短くなり、後続の母音に同化する傾向を示す。弱音節は、その母音部分を /ə/ で表す。

⁶ テキストは、貴州省開陽県高寨郷の3つの村出身の5人のネイティブスピーカー (主として40歳代から70歳代の男性) に語っていただいたもので、35篇ある。本文中では、『』でそれぞれのテキストのタイトルを示す。

次の例では、動詞 *tʃhiA* 「話す」が目的語に *lanB* 「話」をとっており、その後に関節表出詞が生起している。

- (2) *ʋluC tsuA ɔanB tɔAmpheB -seA tsoC- ʔyɔnCɛŋɡuA-qliB-ʔyɔnCɛŋɡuA-ɔaC tsoC- taA niB*
 hatch exit CLF girl CONJ then good.girl-*-good.girl-* then with 3

puC tsoC- tʃhiA lanB -kaAtaBkəAtuC.
 sleep then speak speech EXPR

「生まれてきた子は、それはそれはきれいな女の子で、ダウンパは夜になると一緒にベッドに入り、ひそひそ話にふけた。」『卵から生まれた娘 (二)』

意味的には、空間的・時間的な一定の領域に対して動作・状態が全体に行き渡る様子を表すようである。擬音的な場合においても音の一度の発生ではなく、継続的な音の発生を表す。例えば、以下の例においては、山姥が食べているときに歯が「カチカチ」鳴り続ける様子を表している。

- (3) *tsoC- nonA -muAɔaBmuAɔuC aŋɔɔA ntʃhiA -ŋkuAɣəBŋkəAɣyC jeB.*
 then eat EXPR mouth sound EXPR FLL

「(山姥が) がつつ食べると歯がカチカチと音を立てた。」『山姥 (二)』

四音節感覚表出詞と動詞には多様な組み合わせが存在するようである。例えば、*-taAlaBtəAluC* は、テキストからの例 4 のように、「戦う」という動詞と共に起しているが、この感覚表出詞は、「休みなく続く様子」を表しており、多くの動詞と共に起できるようである。⁷

- (4) *jiC- tsonC tɔAwɪB ʔwuA- ɔanB tsoC- szA-ŋtoC -taAlaBtəAluC.*
 CLNK deliver hand NUM CLF then RCP-fight EXPR

「手を放すと、二頭の牛は互いに必死に押し合う。」『ミャオ族の年越し』

テキストに現れる四音節感覚表出詞をまとめたのが表 1 である。⁸

表 1 四音節感覚表出詞 (テキストにおける)

感覚表出詞	意味	出現数
<i>-kaAtaBkəAtuC</i>	休みなく話す様子	4
<i>-ʔjiAʔjaBʔjaAʔjuC</i>	果てしなく行う様子	4
<i>-ŋkuAɣəBŋkəAɣyC</i>	噛むときの歯の音	3
<i>-lanAlanBləAleC</i>	量がおびただしい様子	3
<i>-mpuAjaBmpəAjuC</i>	水面が波うつ様子	3
<i>-puAʔleBpəAʔluC</i>	量がおびただしい様子	2
<i>-ɔaAlaBɔəAluC</i>	滑っていく様子	2

⁷ 感覚表出詞と動詞の組み合わせについてはさらなる研究を要し、本稿では詳細を語ることはできない。

⁸ 本稿の表に記述されている感覚表出詞の意味は、感覚表出詞が出現した文脈に沿った解釈で、あくまで事例である。感覚表出詞の詳細な意味的記述をする準備は残念ながら筆者にはない。

<i>-ntaAzaBntəAzuC</i>	繰り返しうごめく様子	2
<i>-phuAlaBphəAluC</i>	バラバラな様子	1
<i>-taAlaBtəAluC</i>	休みなく行う様子	1
<i>-muAðaBməAðuC</i>	むさぼる様子	1
<i>-xoAlaBχəAluC</i>	手足をばたつかせる様子	1
<i>-vuAðaBvəAðuC</i>	継続的に争う様子	1
<i>-ηteaAlaBηtəAluC</i>	水が継続的に流れ出す様子	1

これ以外に、コンサルタントへの聞き取りで収集したものには表2のようなものがある。

表2 四音節感覚表出詞（聞き取りによる）

感覚表出詞	意味
<i>-saAlaBsəAluC</i>	雨が継続的に降っている様子
<i>-ntsaAlaBntəAluC</i>	雨が継続的に降っている様子
<i>-puAntaBpəAntuC</i>	継続的に争う様子
<i>-ðaAvaBðaAvuC</i>	雷が鳴る音、いびきの音
<i>-ηkhaAlaBηkhəAluC</i>	犬の鳴き声

3. 二音節感覚表出詞

2音節の感覚表出詞で、動作・状態の起こっている様子を感覚的に表現する。二音節感覚表出詞は、以下の例5のように性質・状態を表す動詞と共起することが多いが、動作を表す動詞と共起するものもある。

- (5) *tsoC- muB ntanB, ntanB ?lanA qwiC -eB tsoC- təBphluC təAwib. tsoC- mblenC -leBleA*
 then go crack crack CLF egg DEM then put.on hand then smooth EXPR

jeB.
FLL

「山姥は卵を割ると、手に塗った。すると山姥の手はすべすべになった。」『山姥（二）』

二音節感覚表出詞の音韻的特徴としては次のようなものがある。

- ・音節頭子音は必ず同一である
- ・母音は同一母音の繰り返しか、第1音節/i/、第2音節/e/あるいは/a/の組み合わせが多い
 また、形態統語的な特徴としては次のようなものがある。
- ・動詞の目的語の後に生起する

これは、以下のような動詞における目的語の位置に名詞が現れる場合、それより後に二音節感覚表出詞が現れるということである。テキストでは実証されていないが、作例で示す。この例では、*ηiBlaA*「泣く」が *niB-miC*「彼の母」を目的語としてとっている。作例の意味は、「彼はお母さんを思ってさめざめと泣いた」ということである。

(6) *niB ɲiBlaA niB-miC -siBsiA*. ◇3◇◇cry◇3◇mother◇◇EXPR⁹

意味的には、動詞の表す動作や状態に固有の感覚を表すといえそうである。これらはそれぞれの動作や状態の固有の様子を感覚的に表現するために使われると思われるが、程度の高さを表しているわけではない。ちなみに、程度の高さを示す副詞 *-tsaB* とは共起できない。作例でそれを示す。

(7) **ɳlenA -thiAthaC -tsaB* ◇red◇◇EXPR◇very

(8) **onA mpuC -qlaBqluC -tsaB*. ◇water◇boil◇◇EXPR◇very

二音節感覚表出詞は、複数の動詞との共起が可能である。一方、動詞によりその感覚表出詞が選択的に決まっている場合がある。例えば、*ɳlenA*「赤い」、*qlanA*「黒い」、*qloA*「白い」などの色彩を表す動詞は、それぞれ、*-thiAthaC*、*-ɲiAɲiA*、*-ɳiBɳeA* と決まっている。テキストで確認されるものには以下の表3のようなものがある。

表3 二音節感覚表出詞 (テキストにおける)

感覚表出詞	共起する動詞	備考	出現数
<i>-weAweA</i>	<i>ntshanC</i> 「盛んである」		5
<i>-siBsiA</i>	<i>tɛoC luB</i> 「垂れ下がる」	量が多い様子	1
<i>-leBleA</i>	<i>mblenC</i> 「滑らかだ」		1
<i>-ngleAnglaC</i>	<i>panB</i> 「一杯である」		1
<i>-thiAthaC</i>	<i>ɳlenA</i> 「赤い」		1

テキストに確認されたもの以外で、コンサルタントに聞き取りを行って収集した動詞と二音節感覚表出詞の組み合わせには以下のようなものがある。

表4 二音節感覚表出詞 (聞き取りによる)

感覚表出詞	共起する動詞	備考
<i>-ɲiAɲiA</i>	<i>qlanA</i> 「黒い」 <i>pəA</i> 「暗い」	
<i>-ɳiBɳeA</i>	<i>qloA</i> 「白い」	
<i>-[hiB]henA</i>	<i>ɛwenA</i> 「黄色い」	
<i>-ʔjenAʔjenA</i>	<i>mpəA</i> 「緑色だ」	
<i>-veAveA</i>	<i>niB</i> 「薄い」	
<i>-senCsenC</i>	<i>qwanC</i> 「寒い」 <i>qenA</i> 「おいしい」 <i>ɳyənC</i> 「健康だ、気分が良い」 <i>ntsheA</i> 「清潔だ」	
<i>-ntshiAntshaC</i>	<i>ntiB</i> 「長い」	
<i>-ntiAntaC</i>	<i>qwhanA</i> 「広い」	
<i>-leAleA</i>	<i>ɲæC</i> 「柔らかい」 <i>vzonA</i> 「平だ」	
<i>-piBpeA</i>	<i>ɳæC</i> 「鋭利だ」 <i>soA</i> 「酸っぱい」	

⁹ 「◇」は1音節を表し、その後に続くものがその音節を表す形態素・語のグロスである。形態素・語が2音節の場合には、「◇◇」の後にグロスが続くことになる。

-zɛAzɛA	mbɛA 「辛い」	
-ŋkiBŋkiA	ðenC 「硬い」	
-qlaBqluC	mpuC 「沸騰する」	煮えたものが動く様子
-ŋkhaB'ŋkhuC	tuA 「笑う」	声を立てて笑う様子
-mbzonAmbzonA	tuA 「笑う」	にこにこ笑う様子
-ŋkiBŋkoA	ɔŋonC 「良い状態だ」	

4. 単音節感覚表出詞

単音節形式で、動詞に後続して動作が刹那に発生することを表す。テキストからの例を示す。この文の動詞句部分 *toA ðoB kwenA -vlonC* をより原文に則して訳すと「火をつけるとパッと明るくなった」ということである。

- (9) *aiAjaA, ɛɛAɛɛA tɔAtanA -seA, qlenAqaA tsoC- toA ðoB kwenA -vlonC.*
 INTJ a.while a.little CONJ PN then light fire bright EXPR
 「しばらくして、クリンカは明かりをつけた。」『卵から生まれた娘 (二)』

単音節感覚表出詞は、名詞や動詞など一般的な語と同様の音節構造をしており、形式上音韻的制限はないが、以下のような傾向がある。

- ・他の語類に比べて音節頭子音が前鼻音化子音である頻度が高い¹⁰

語彙調査票 CALMSEA WORDLIST (Matisoff 1987) の基礎的意味項目 191 項目に対応するミャオ語の語において、当該語の単音節の語根部分を調べてみると、191 個の語根中 38 個に前鼻音化子音が見られる (19.9%)。なお、この 191 語には感覚表出詞は含まれていない。これらには漢語からの借用語も含まれるが、それらも音韻的には固有語の音韻を示し、借用語専用の韻母や声調は含まれない。したがって、38/191 というのは一般的な固有語中の前鼻音化子音の頻度を示すものと言ってよいだろう。一方、テキストに現れた 29 語の単音節感覚表出詞のうち、18 語に前鼻音化子音が見られる (62%)。前鼻音化子音が高い頻度で見られる理由は不明である。

単音節の感覚表出詞の形態統語的な特徴としては次のようなものがある。

- ・動詞の目的語の後に生起する

動詞に目的語がある場合にはその後に生起する。テキストからの例を示す。例 10 では、動詞 *tuA* 「閉める」が目的語に *aAzonA* 「ドア」をとっており、その後に感覚表出詞が生起している。コンサルタントによると、感覚表出詞を目的語の前に置くことはできない。

- (10) *kanB tsoC- tuA aAzonA -ŋjaA, tuA aAzonA -ŋjaA jeB.*
 1SG then close door EXPR close door EXPR FLL
 「『ドアを閉めよう。』と言ってドアをピタッと閉めた。」『張打槍』

例 11 では、動詞 *ðuA* 「噛みつく」が目的語に *aAndziBðiA* 「唐臼」をとっており、その後に感覚表出詞が生起している。

¹⁰ 前鼻音化子音とは、破裂音と破擦音の前に同器性の鼻音が付いているものである。

- (11) *tsoC- tsonC aAŋɔA muB ɔuA ʔlanA aAnɛiBɔiA -ŋkonB.*
 then deliver mouth go bite CLF mortar EXPR
 「そう言って山姥は唐臼にガブリと噛みついた。」『山姥 (二)』

意味的には、動作・変化が刹那に発生する感覚を表現する。したがって、単音節感覚表出詞は、動詞のアスペクト解釈を決定する。動作を表す動詞の場合には、その動作が継続的ではなく、瞬間的に捉えられる。例えば、例(10)においては、*tuA*「閉める」が単音節感覚表出詞 *-ŋtaA* をともなって「ピタッと閉める」というような瞬間的完了を示す。一方、状態を表す動詞の場合には、当該状態への変化を表す。例えば、例9では、状態を表す動詞 *ɓwenA*「明るい、黄色い」が、単音節感覚表出詞 *-vlonC* をともなって、「パッと明るくなる」という変化を表している。以下の例 12 においても、状態を表す動詞 *pəA*「暗い」が、単音節感覚表出詞 *-ntsenB* をともなって、「パッと暗くなる」という変化を表している。

- (12) *χwaAlaA, tsoC- tshuA taA- aiCjoA ʔlenA -thiAthaC. χwaAlaA, aiCjoA tsoC- pəA*
 IDEO then exit NMLZ INTJ red EXPR IDEO INTJ then dark
-ntsenB.
 EXPR
 「バリバリ。雷光が真っ赤に光ったかと思うや、突然真っ暗になった。」『貴州大戦』

テキストで確認されるものには以下の表5のようなものがある。テキストで共起した動詞、コンサルタントに聞き取りを行って収集した動詞と単音節感覚表出詞の組み合わせを、テキストにおける数量の順で示す。

表5 単音節形式の感覚表出詞

感覚表出詞	共起する動詞 (テキストにおける)	共起する動詞 (聞き取りによる)	数量
<i>-ntsenB</i>	<i>nteC</i> 「跳ねる」 <i>tshuA</i> 「出る」 <i>pziA</i> 「飛び出す」	<i>peB</i> 「疲れる」 <i>ntsheC</i> 「恐れる」 <i>qhlenC</i> 「(水が) 流れる」 <i>ɓwaA</i> 「逃れる」	10
<i>-ŋtaA</i>	<i>ʔwuB</i> 「覆う」 <i>khuA</i> 「閉じ込める」 <i>tuA</i> 「閉める」 <i>tsenC</i> 「鍵をかける」 <i>qonB</i> 「止める」	<i>qonB</i> 「止める」 <i>ʔwuB</i> 「覆う」 <i>mpaB</i> 「貼る」 <i>ʔnonA</i> 「座る」 <i>ŋdeA</i> 「隠れる」 <i>ntanB</i> 「搗く」 <i>mpaC</i> 「着る」 <i>qheA</i> 「縛る」 <i>khuA</i> 「閉じ込める」 <i>tszBqaA</i> 「覆う」 <i>ʔyeA</i> 「隠す」 <i>tuC</i> 「入れる」 <i>puC</i> 「眠る」	7
<i>-ntuA</i>	<i>jenA</i> 「終わる」		7
<i>-niA</i>	<i>pəA</i> 「暗い」 <i>mæB</i> 「(火が) 消える」		6
<i>-vlonC</i>	<i>ʔjenC</i> 「飛ぶ」 <i>phæA</i> 「吹く」 <i>ɓwenA</i> 「明るい」	<i>jeC</i> 「火が付く」 <i>ntonC</i> 「浮かぶ」 <i>ʔjuC</i> 「引っ張る」 <i>poA</i> 「開ける」 <i>qluB</i> 「溢れる」	4
<i>-ŋtonA</i>	<i>ɔaC</i> 「死ぬ」		4
<i>-mpuA</i>	<i>ɔoC</i> 「音がする」 <i>ndoC qoC</i> 「投げて置く」(大きな音という意味になる)		4

-phyA	ɥæŋC 「落ちる」 ʔluC 「おさまる」		4
-qhlonB	juA 「抜ける」 tuA 「笑う」		2
-ntaA	pinB 「平らだ」 piaB 「潰れた」	teiBqlonB 「倒れる」	2
-mplonB	mplaC 「溢れる」		2
-ŋkonB	ðuA 「噛みつく」 paA 「つかむ」		2
-ntsenB	tehiA 「怒っている」 pøA 「暗い」		2
-ntiC	kuC 「酔っている」		2
-mpøA	soA 「おさまる」		2
-mplonC	ðoC 「音がする」(大きな音という意味になる)	moA 「沈む」 nɬanB 「たたき切る」 ntsanB 「蹴る」 tanC 「切れる」	2
-qhlanB	soB 「起きる」		2
-khaA	nshiA 「音がする」(小さな音という意味になる)		1
-shaA	ðoC 「音がする」(小さな音という意味になる)		1
-ywenC	moA 「没する」		1
-phøC	tshuA 「出る」		1
-mbzonC	lenC 「尖った」		1
-ntonB	mbziA 「下に垂れる」		1
-mponB	kaC 「(水が) 退く」		1
-qhlonA	tuA 「笑う」		1
-ŋkoA	paA 「つかむ」		1
-ntsuA	suC 「休む」		1
-mblonC	tonB 「戻る」		1
-ʔnaA	naB 「青ざめた」		1

【参考文献】

Enfield, Nick (2007) *A Grammar of Lao*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

田口善久 (2016) 「ミャオ語文法ノート～羅泊河ミャオ語の人称詞について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』18: 13-30.

田口善久 (2019) 「羅泊河ミャオ語の関係節について～ミャオ語文法ノート(5)」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21: 33-54.

Matisoff, James A. (1978) *Variational semantics in Tibeto-Burman: the "organic" approach to linguistic comparison*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.

Expressives in Lan Hmyo

Yoshihisa TAGUCHI

Lan Hmyo, a Hmongic language spoken in Guizhou, has a word class called expressives. Expressives in general express the sensations that speakers acquire through perception. In this brief study, the author describes the form and function of the word class in Lan Hmyo. The expressives in Lan Hmyo are divided into three subclasses depending on the number of the syllables that each expressive has: four-syllable expressives, two-syllable expressives, and single-syllable expressives. The first subclass expresses pervasion of the state/action that the verb of a sentence describes. The second subclass expresses the idiosyncratic sensation of a state/action. The third subclass expresses the sensation of the instantaneous occurrence of an action/change.